

第IV章 海の人材育成と 海事文化の振興

現在、海事産業においては、次世代を担う人材の確保と育成が大きな課題となっています。このような中、市内にはわが国初の造船技能学校として因島技術センターが設立され、造船技術者の育成に取り組んでいます。また、船員養成を使命として設立された尾道海技学院は、船員や海洋レジャーに関わる人材育成を行うとともに、海の安全教育を展開しています。

一方で、市内各地には、海や港に関わりのある歴史的な施設や景観が残されています。尾道を代表する祭りも、海や港とともに発展してきた歴史の中から生まれています。こうした海事文化は、尾道の特徴とも言えるもので、これらは海事都市としての尾道市が海運業や造船業などの海事産業の単純な集積ということではなく、特色ある「海のまち尾道」であることのゆえんとなっています。

●造船業を担う人づくり

◆我が国初の造船技能学校の設立

～因島技術センター～

近年、産業構造の変化が進む中で、「ものづくり」に不可欠な基盤的技術の衰退が懸念され、また、技能者も高齢化に伴って、技能の継承が危惧される状況が続くようになりました。尾道地域の造船業界ではこうした課題に早くから着目し、1999年4月、日本で初めて造船事業者による「民間の知恵を生かした低コストで効率的な造船技能学校」として「因島技術センター」を開設しました。

同センターは、尾道地域の造船会社から現場をそのまま借り受けて研修施設とし、旧日立造船を中心としたOB技能者などが研修講師となっています。基礎的な技能から高度で特殊な技能まで、幅広く習得するための教育を共同化し、有能な人材を育成する取組みが官民一体となって続けられています。

研修内容は期間1~2週間の専門技能研修と期間3か月の初任者研修からなり、受講者は主に尾道地域の造船技能者ですが、専門技能研修には全国各地の造船所から参加があり、瀬戸内海地域を中心に我が国の造船技能の伝承に大きく貢献しています。

このように技能伝承のシステム化ができたことで、新人でも3か月で一通りの技術を身につけ、溶接、ガス切断、クレーンの資格等も取得できるようになり、それま

で技能伝承に時間的な困難があったり、指導者の確保などで苦労してきた造船所から高い評価を受けました。

こうした因島の取組みは「人材育成の因島モデル」として国からも注目され、因島のケースをモデルとして、全国各地で造船技術センターの設立が進められました。今では横浜、今治、大分、長崎、相生にもこうした技術センターが作られています。

Column

ぎょう鉄研修の風景

2009年の秋晴れの日に、株三和ドックを会場として、ぎょう鉄（鋼板を曲面に加工する技術）の中級専門技能研修カリキュラムが行われていました。鞍型板加工の実技試験の会場には、平らな鉄の厚板が10枚ばかり置かれ、板ごとに2~3人の研修生が割り当てられ、曲げ加工に取り組みました。講師は高温のガスバーナーを危険なく使う方法を指導するとともに、火の強弱や鉄板を焼き付ける時間間隔について、自らの経験を交えて指導しました。受講者の年齢層は20歳代前半から中高年までさまざまでしたが、皆新たな技能を習得する意欲は高く、回数を重ねることで自分の技術が上達していくことに喜びを感じていました。また、講師も短時間の指導で受講者に成長が見られるようになっていくことに達成感を感じていました。こうして伝承された技能は、今後尾道地域を始めとして、全国から訪れた受講者が各自の造船所に戻って発揮され、日本の造船技術を維持発展させていく原動力になるのです。



中級専門技能研修（ぎょう鉄）

Voice

因島技術センターの立ち上げ

「造船技能者のいびつな年齢構成と後継者育成に危機感を持っていた因島地域の造船事業者の熱意が、当センターを作ったと言える。また造船所OBの指導員の皆さん、地域や後輩のためという熱い指導ぶりには頭が下がる。」

株三和ドック 寺西社長

研修講師のやりがい

「教える際は、若い世代には語彙に限りがあり、理解力に制限があるので、現物を見せてはっきりと目で確かめさせるようにしている。研修生の中には短時間の中で日々上達していくのが見える人と、なかなか見えない人がいるものの、全体として上達したことが見えてくるようになるのが、指導者としてのやりがいである。」

講師(51歳、株三和ドック)

Voice

技術の獲得に加えて交流も有意義

「ぎょう鉄研修では、最初焼き付けが難しかったが、回数を重ねて教えてもらうことでできるようなり、面白くなった。自社では担当が異なり、ぎょう鉄はたまにしかやらないが、今回の研修で知識がついたので、これから活かしていくと思う。受講者は皆歳が離れていたり、会社が異なるので、色々な人と一緒に過ごすことができてためになった。」

受講者(20歳、内海造船㈱)

◆中高生のインターンシップ

造船会社では、高校生に対するインターンシップを実施しています。また中学生に対するキャリア教育も実施しています。



内海造船で実施する高校生対象のインターンシップ

Voice

インターンシップ

「瀬戸田高校から希望により毎年1~3人を受け入れている。1年間29週(毎週金曜日午後)実施し、授業の一部となる。ものづくりの講義から始め、最後に溶接で本立てを作らせている。中学生もインターンシップで2日くらい来ている。このような体験学習はもっとあってもよいだろう。」

内海造船㈱ 川路工場長

●海の人材を育てる

◆船員養成を使命として設立～尾道海技学院

尾道海技学院は、戦後の疲弊した海運業界の復興のために、船員養成を使命として1949年に設立されました。教室がなかった当時は寺を借りて授業をしていたと言われています。以来10万人以上を船員として海運業界に送り出しています。

また、穏やかな瀬戸内海を活かして、1981年に日本で初めて小型船舶操縦合宿コースを開設し、4万人以上がこのコースで小型船舶操縦士免許を取得しています(国家試験免除)。

2009年からは海事都市尾道推進協議会と連携して、内航船員を養成する「六級海技士(航海)養成課程」(p39参照)を開設しています。

◆海洋レジャーに対応した人材の養成

1986年には「海で働くスペシャリスト」の養成を目指して、日本海洋技術専門学校(愛称:マリンテクノ)を設立しています。海洋技術学科、ダイビング学科、船員学科、海洋デュアルシステム学科、海洋技術研究科があります。



◆海の素晴らしさを感じられる青少年の育成

海の人材を育てる新たな役割として、青少年の育成にも取り組んでいます。市内の無人島加島や尾道マリン・ユース・センターを利用して、海事都市尾道推進協議会とも連携しながら、児童生徒や保護者を対象に体験航海やマリンスポーツ体験を行ない、海とのふれあいの場づくりを推進しています。



尾道では、船員の養成をはじめとして、ヨット・ボートなどの小型船舶操縦士免許の取得、ダイビングなどの海洋レジャー技術の習得が可能です。さらに、青少年に対するマリンスポーツ体験を通じた海とのふれあいの場づくりも進められるなど、尾道は海に関わる多彩な人材育成の拠点となっています。

●海事文化の地域づくり

◆市内各地に多彩な海事文化

中世からの海運業の長い歴史を持つとともに、近代からは造船業を発展させてきた尾道市では、街並み、景観などに「海事文化」を見るすることができます。

－瀬戸田の堀内家－

瀬戸田港から耕三寺へ向けて延びる本町通りへ入ると、塩田と海運業を中心に栄え、瀬戸田きっての豪商だった堀内家の大きな屋敷が見られます。傍に建つ歴史民俗資料館の土蔵も元は堀内家の塩蔵でした。

堀内家では船9隻を所有し、塩田で作った塩を九州、北陸方面にまで輸送し、帰りの便にその地の産物を積み大阪方面へ運びました。九州各地の炭田から得られる石炭は、瀬戸内海一帯で営まれる塩田に供給されました。

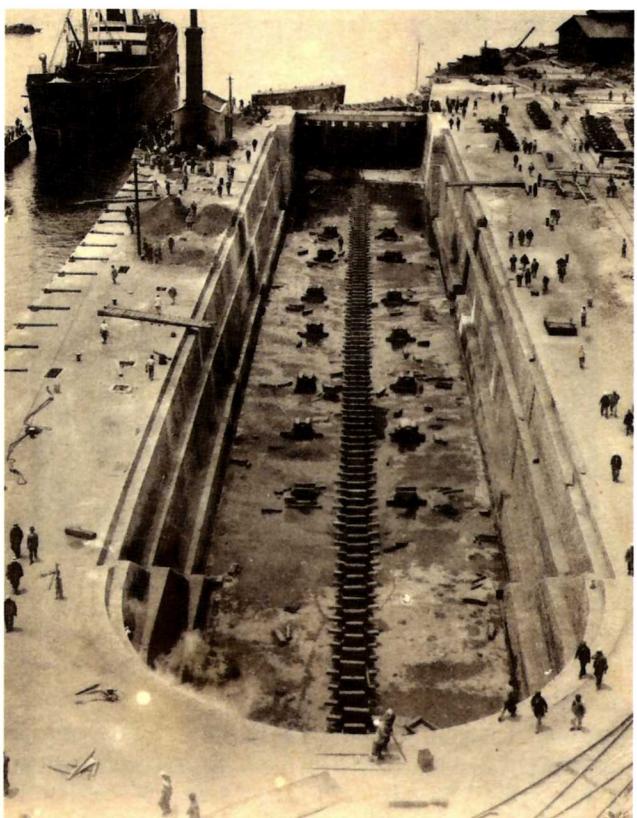
江戸期には瀬戸田が商港としてにぎわっていたことを、この屋敷は物語っています。



堀内家屋敷

一日立造船石積ドック

1911年(明治44)、因島に進出した大阪鉄工所は因島工場(現日立造船因島工場)に石積みのドックを造りました。これは海と直接つながっており、船が進水する際には海側の門を開いて直接海水を引き込み、船を浮かべる仕組みになっています。この石積ドックは1世紀経た現在も一部が残されており、近代の重要な産業遺産となっています。



石積ドック

市内に見られる海事文化

県営上屋

ライトアップ

瀬戸田「ホーラエンヤ」

瀬戸田の堀内家

絵のまち尾道四季展

造船展示会
「造船のまち尾道」

尾道みなと祭

因島水軍まつり

日立造船石積ドック

－県営上屋－

JR尾道駅西側の西御所地区には、戦時に建てられたものでは県内で尾道だけに残っている港湾倉庫があります。1943年(昭18)に建てられた鉄筋平屋建て延べ約2,000m²の西御所2号上屋です。「みなとオアシス尾道」のエリア内にあるこの倉庫は、現在、港湾倉庫としての利用ではなく、演劇、伝統芸能、物産展、骨董市などのさまざまなイベントが開催され、尾道文化の再考と発展につながる活動に使用されています。また、ここを瀬戸内しまなみ海道を走る自転車愛好家のためのサイクリング基地などに改修し、新たな観光拠点とする計画も進められています。



県営上屋



みなとオアシス尾道での社会実験
「みなとオアシスフェア」

－ライトアップ－

尾道駅を出ると目の前の尾道水道を挟み、たくさんのクレーンが目に入ります。このクレーンは造船所のシンボルであり、また景観を特徴づけるものにもなっています。

向島ドックの5基のクレーンは、夜になると光の衣装をまとめて美しく輝き始めます。水面に伸びた明るい光の帯を、渡船がゆっくりと払いのけるようにして走っていく様子は、幻想的な世界を醸し出しています。

尾道の特徴ある風景として、専門家からも高い評価を受けています。



クレーンのライトアップ

◆造船文化の発信

尾道ではこれまで多彩な造船文化を育んでおり、それについて広く発信する活動を行っています。

－造船展示会「造船のまち尾道」－

2008年2月から7月にわたり、海運業と造船業によって発展を遂げたまちの歴史をたどる企画展「造船のまち尾道」が、尾道商業会議所記念館とおのみち街かど文化館を会場に開催されました。

この展示会では尾道が近代造船の歴史を刻むこととなった経緯や、その後の民間造船会社の発展の様子を示す写真などが展示されました。

また「船・港・海」をキーワードに、江戸期から昭和の時代まで活躍した人にスポットを当てて、「海事人物伝」として紹介されるとともに、瀬戸内海往来としてさまざまな船の模型が展示されました。



向島の尾道船渠（展示写真）

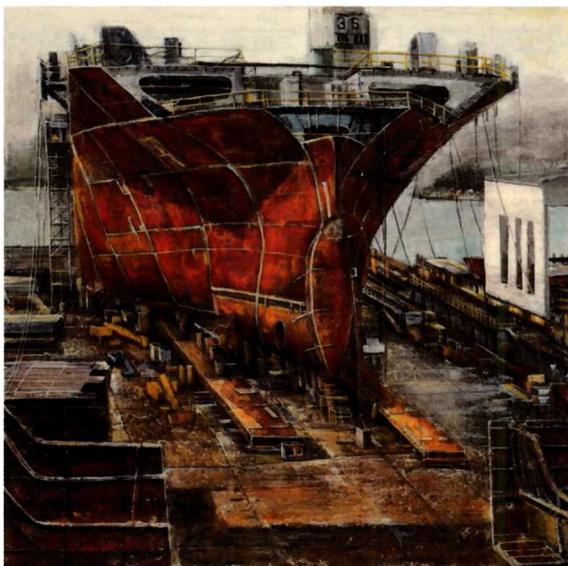


大錨の完成を喜ぶ鍛冶屋町の人々（展示写真）

—絵のまち尾道四季展—

「絵のまち尾道四季展」は豊かな歴史に育まれた文化遺産と美しい景観に恵まれた尾道を画題とする内容で、1983年に第1回展を開催して以来、2年に一度の隔年開催を続けてきました。第13回展には38都道府県から1,000点を超える作品が寄せられ、造船に関する絵も多数出品されました。

2009年2月から3月にかけて、尾道市立美術館をはじめ市内商店街などで行われた展覧会は、多くの鑑賞者でぎわい、造船のまち尾道のアピールにも一役買いました。



第13回展金賞受賞作品、岡本太志「造船の町・因島」
(資料) 絵のまち尾道四季展運営委員会

◆港・海運に由来する祭り

祭りは地域の伝統文化を伝え、表現するものです。尾道を代表する祭りは、海と暮らしをともにする尾道の人々の日々のいとなみの中から生まれ、今まで引継がれています。

—尾道みなと祭—

1741年(寛保元年)に町奉行だった平山角左衛門が港湾整備を手がけたことで北前船の入港が盛んになり、商港都としての礎が築かれたことから、彼の功績をたたえるとともに、尾道の発展を願って1935年(昭和10)から続く祭りです。

創作踊りコンテスト「ええじゃんSANSA・かり」をはじめ、パレードやさまざまな楽しいイベントが行われ、最もにぎやかな祭りのひとつとなっています。



尾道みなと祭

—因島水軍まつり—

南北朝時代から室町・戦国時代にかけて、因島を拠点に活躍した村上水軍を再現する祭りです。

水軍城での出陣式、村上水軍の菩提寺の金蓮寺で先人感謝祭を行った後、土生港周辺でパレードや跳楽舞を踊る「島まつり」、夜の海辺の砂浜に水軍跳楽舞や鎧武者が集結し、大松明の練りまわしや花火打ち上げを行う「火まつり」、村上水軍の伝令船「小早」による競争を繰り広げる「海まつり」の3部構成で行われます。



因島水軍まつり「小早」競争

—瀬戸田「ホーラエンヤ”—

宮島の厳島神社大鳥居造営の際に、高根八幡神社の境内にあった大楠を差し出したとの言い伝えから、宮島の管絃祭に合わせて旧暦の6月17日に行われる祭りです。

大鳥居をかたどった船に提灯を下げ、太鼓や鉦をたたきながら、親船の「ホーランエンヤ」の掛け声に、引船が「ホーランエンヤ、ヨイヤサノサッサ」と応え、夜の瀬戸田水道を漕ぎ上ります。



ホーラエンヤ